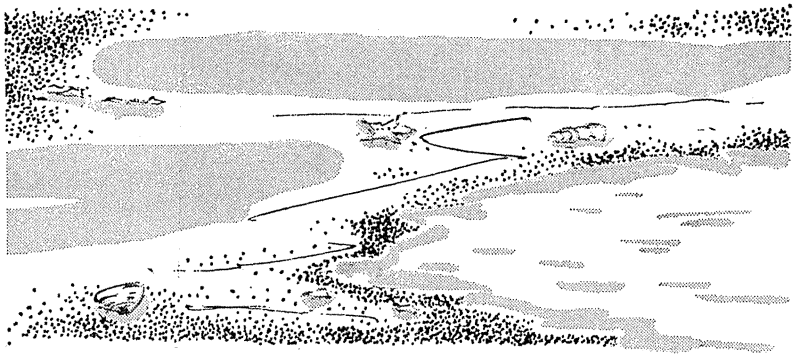


文部時報

昭和五十六年八月
第一二五一号

特集▩生涯教育

学習国家をめざして……永井　道雄…4

談話
「生涯教育について」の答申に当たって
……高村中央教育審議会会長…8
中央教育審議会の答申を受けて……田中文部大臣…9

▽対談
「生涯教育について」をまとめて……10
有光次郎・山崎正和

成人教育と学校……天野　郁夫…19
家庭環境と家庭教育……松原　治郎…25
人の老化と高齢化社会の教育……太田　邦夫…33
▽座談会
生涯教育を進めるために……39
（出席者）沼尻　和也・江口　篤寿・岡野俊一郎
中村　克子・（司会）宮野　禮一
▽解説・資料
一人一人の生涯を通ずる
自発的学習のために……大臣官房企画室…53
文化財紹介●大塩八幡宮拝殿（宮沢智士）
名作シリーズ●納涼図（解説　小林　忠）……32
▩次号目次……96

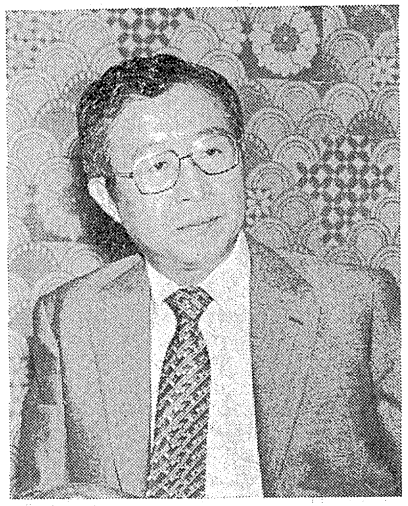
表紙　小林敏子　カット　赤羽根秀一

「生涯教育について」をまとめて

有光次郎氏
日本芸術院長・第12期中央教育審議会副会長

第一二期中央教育審議会が、去る六月一一日に「生涯教育について」答申しました。そこでこの機会に、同審議会の副会長でもあり、生涯教育小委員会の座長を務められた有光次郎先生と、小委員会のメンバーとして答申の取りまとめに当たられた山崎正和先生とのお二人に、答申に至るまでの経緯をふり返っていただくとともに、生涯教育というものの考え方について、お話し合いいただきました。

―編集部―



山崎正和氏
大阪大学教授・第12期中央教育審議会委員

答申までの道のり

山崎　生涯教育という言葉は、今でこそ大変ポピュラーになって、一種の流行語になりつつあるわけですが、数年前まではそれほど知られた言葉ではなかったと思います。そのようなテーマを、中央教育審議会が取り上げたということは、大変、先見の明があったと思うのですが、この問題が中教審で最初に浮かび上がってきたのは、いつごろのことだったのでしょうか。

有光　昭和四六年、第九期中教審の特別委員会で、生涯教育について検討したことがありました。

当時、生涯教育という考え方は、ユネスコでのポール・ラングランの報告などで話題になってきておりましたものの、我が国での受け止め方は、まだそれほど根は広くなかったと思います。しかし、中教審としてはこれは将来の大きな課題であるというとらえ方をしました。ただ、十分な審議を尽くす時間がなかったものですから、答申にまでは至らなかったわけです。

山崎　しかし、そのころには生涯教育という言葉は、非常にフレッシュな響きを持っていたことでしょうね。

有光　そうですね。

その後、第一一期の中教審では、そのような経緯も踏まえて、生涯教育の問題を検討することになったわけですが、この生涯教育という言葉は非常に常識的な言葉であると同時に、ユネスコなどが取り上げた生涯教育というものには、特別な意味があったものですから、そのようなことについて十分に論議し、共通の理解に到達するには、多少の時間がかかったように思います。小委員会を設けて審議したわけですが、答申案にまとめるまでの十分な論議を尽くすことができず、小委員会の報告を総会が了承するという形で、第一一期の中教審は終了したわけでございます。

山崎　それが第一二期の中教審にも引き継がれ、いろいろ議論の末に我々の最大公約数をまとめたわけですけれど、世間では生涯教育という言葉だけが知られていて、例えば社会教育とはどのように違うのかということも、まだ十分には理解されていないような気がします。特に今回の答申は、具体的な施策についてもさることながら、教育全般についての考え方の転換ということに重点があったと思いますが……。

生涯教育の理念

有光　ご承知のように、生涯教育というのは、一〇数年前にハッチンスが「学習社会」という考えを提案し、その後、その考え方がユネスコに継承されて、いわゆるフォール・リポート「未来の学習」(Learning to Be) という名前で日本にも紹介されておりますが、生涯教育という言葉自体が、一面また非常に未来社会に対して大きな理想をはらんだ言葉でもありますので、その点について理解を得るということは、やはりそれ相応の時間がかかるのではないかと思います。

日本という国は非常に教育的なエネルギーの豊富な国だと思うのですが、そのエネルギーが特定な学校へ進学するというようなことのために費やされて、教育本来の趣旨から少し離れてきているのではないかという声があります。一方では、ユネスコのような場で国際社会の将来を展望し、今後はぜひこうあるべきだという論議がされている。しかし、その思想と日本国内における実態とが、必ずしも合致していなかったように思うわけです。ですから、ユネスコのいう生涯教育の趣旨が日本国内で広く理解され、その思想で日本の教育の核心を考えるということは、なかなか盛り上がってこなかったのだと思います。

しかし、日本の教育の在り方について、いろいろ心配される方々の意見というものは、当然強くなるものでして、その意見を集約していくうちに、やはりユネスコなどの思想を踏まえた上で、日本の将来を考えていくことが日本のためであり、ひいては世界の平和のためにも非常に大事なことではないか、というような合意がだんだんできてきたのではないかと思います。

山崎　それでも今なお、生涯教育といいますと学校教育と対立するもの、あるいは学校教育と同列にあるものという理解がありますね。このへんが社会教育と生涯教育が混同されるゆえんではないかと思うのですが、今回我々はそうではないということを大変強調したわけですね。

有光　生涯教育というのは、結局、我々が本当に充実した生活を送るために必要な教育を生涯にわたって受け得る、また受けたいという人に対しては、いつでもその機会が与えられるということが、今後の人類の繁栄のために非常に大切なことだという考え方であって、そのような考えから、全ての教育の場が見直されていいのではないか、というような理念であると思うのです。

ですから、今までのように学校教育はそのままにしておいて、社会教育の方で少し考えれば済むという問題ではなく、広く教育全体の在り方を通じての、一つの理念というものが生涯教育であって、一九八〇年代以後の教育の在り方は、そのような立場で見直すべきであるということだと思います。

山崎　我々が今度の答申の中で「理念」という言葉を使ったのもそのへんにあると思うのですが、それでもおそらく実際の教育の現場にいる人々、あるいは市町村で教育行政に携わっている人々にとっては、まだどういうことかよく分かりにくいところがあるのではないでしょうか。

有光　我々は本当にそれを痛感しております。しかし、決して悲観しないことです。この一〇年の経過をたどりまして、学習社会の到来を信じて、生涯教育の面から全ての教育の在り方を見直すべきだという合意に中教審が到達したということ。中教審の委員の方々は、いろいろな考えを持っている方々の集まりですから、私は、その会で合意を得たということは非常に意味があることではないか。やはり、時がくれば一層その趣旨が皆さんに行きわたるのではないかと思います。

人間の本質を考え直す

山崎　私は、日本の学校教育というものは、それなりに大変成功してきたと思います。もちろん、受験競争の過熱ということも見られますが、何といっても日本の教育水準、とりわけ初等中等教育の充実が日本の社会の安定や、経済の発展に寄与してきたことは、世界的な評価を受けているところだと思いますね。そのような成果の上に立って、やっと生涯教育という新しい考え方を導入することができる、歴史的な段階がきたのだという気がします。

私自身の感想を申し上げますと、現時点における日本社会の最大の問題点は、人間の一生が空間的にも時間的にも非常に細かく区切られていて、その一つ一つの単位がタコつぼのようになっていることだと思うのです。つまり、空間的には、学校、家庭、職場がそれぞれ閉じら

れた場所をつくっており、個人は時間の軸に従って、幼時期、学生時代、社会人時代といった形で生涯を分断されています。そのことが本当の意味での市民というか、多様な側面を持った人間をつくる上で、障害になっていた面があるのではないかと思うわけです。

それが今後は、人間は生涯、好奇心と向上心を持ち続け、生涯、自分を陶冶していくものだということを一本の軸として、これまでのいろいろなタコつぼのからが破れていくことが期待できるのではないか。もしそうだとすると、これは相当大きな社会変化の芽生えであるという気がしますね。

有光　私も本当にそう受け止めたいと思いますね。今回は、充実した生活を送るためにということにとどめておりますけれど、人生の意義、我々が生存している意義は一体なんであるのか。それに伴って教育というものはどうあるべきか、というような問題につながるところへさしかかってきているのです。

今までは、ある学歴を得るため、ある地位を得るため、あるいはある権力を得るための教育ということが評価されておりました。しかし、人間の評価というものは、いつどういう学校を出たかということではなく、どういう能力を現にもっているか、どういうことを知っているかとか、あるいはあらゆる機会を自分の勉強に投入して、時勢の進展に即応するように自分を築き上げていっているか、あるいは知力だけではなく情操においても、例えば「愛」とか「慈しみ」といったような心ばえがなければ、本当に人間として、人間の生活を全うすることはできないのだということです。

山崎　学歴による評価を非難する声がありますが、私などは門地、門閥というようなものが社会を決定している国よりは、学歴が人間を決める社会の方がよほどましだろうと思います。ただ、問題はその学歴がある段階で固定されてしまうことであって、考えてみると、人間が二〇代前半で一生の通行キップを得てしまうということは、大変不合理な話だと思います。それ以後の学習努力というものが、広い意味での学歴として認められるような社会になれば、学歴社会であってもいっこうに差し支えないと思いますね。

有光　賛成ですね。我々は終戦後に、平和で民主的な国家の形成を志向したわけですが、民主的ということについての受け止め方が、今から考えますと一部に、多少好ましくないとらえられ方をされていた面もあったと思います。ですから、そのような考え方に対する、一つの指針として生涯教育というものが出てきたのではない

か、という気もするわけです。

山崎　それは、権利や利益というものを物差しにして平等ということを考えるのではなく、もう少しほかに人間がそれぞれ満足できるような、いうなれば的を作るということでしょうか。

有光　そうですね、もっと人間的な、もっと根源的なものですね。人間とは一体何か、ここで、人間というものの本質を考え直してみる。そうなれば当然教育もそれに寄与するような教育でなければならないと思います。またあくまでも、知られざる一人一人の人間が健康で、楽しく、賢い生涯が全うできるようにするということが、当面の目標といえるかと思います。

人間の結びつきを大事にする

山崎　今、生涯教育を世界中で議論していますけれど、私は、日本には一つの大きな利点があると思います。それは、日本人は、好奇心や向上心というものを、抜きがたい本性として持っていて、その中身は実に多様だと思いますが、だれもが何かを学ぶことに喜びを感じている社会というものは、そうたくさんはないのではないかと思うわけです。

しかも日本の場合は、社会的な格差がなく、勉強する層としない層というものが分かれていませんね。外国では生涯教育に国家が金をつぎこむと、勉強したい一部の人たちはますます得をして、ほかの人たちはますます差をつけられる。したがって生涯教育というのは、平等の原則に反するという声があるそうですが、日本ではそのようなことはありませんね。

有光　日本文化の一つの特色だと思いますね。都会と地方の格差というものは、日本でもあるわけですが、都会の文化を地方でも評価するという共通的な下地が日本人にはあるわけなのです。教育についても、自分は無学であるという人は学問を尊重しようという気持を持っているわけで、私は、そのようなところが、日本人の非常に優れたところだと思います。

山崎　現在、各地に〇〇市民大学などという、市民が自分で学習する機会がたくさんできておりまして、例えば長野県には昔から「信州哲学会」というものがありまして、いわば専門家ではない素人の人たちが一生懸命に、哲学などという浮世ばなれのしたものに打ちこんでいらっしゃる。ある意味では、もちろん中教審も先見性がありましたが、国民の方がずっと先を歩いていた感じがしますね。

有光　本当ですね。私は人間に個性があるがごとく、

地域にも特性があってそれがお互いに競合しあいながら、日本の国を安泰にしているということは、非常にいいことだと思います。

山崎　今一番大事だなと思うことは、そのような向上心を、一人一人の内部にだけとどめておかないで、それを通して人間の新しい結びつきを持ち得るような形にしていくことだと思います。特に今回の生涯教育という考え方の中には、コミュニティという考えがかなり出ておりまして、これを日本語で「地域社会」と書いたわけですけれど、地域社会とのつながりということが強調されたことは、私は大きな一歩だという気がしますね。

学習社会を樹立する

有光　日本人は、本来的にいろんなものを受け入れて、自分のものにしていこうという選択の能力を持っている民族だと思いますが、今度の生涯教育の問題の取り上げ方にしましても、ほぼ一〇年近くの経過を経ておりますけれど、今後、非常に日本らしい展開をするのではないかと思います。ことに、放送大学ができることになりましたが、これは生涯教育の立場からいって、今後の日本の教育が非常に面白い展開をする契機になるのではないかと思いますね。

山崎　私は、教育というものは、もちろん技術とか、特に幼い子供に対しては社会の規律というようなことを、上から下に向かって教えることも必要な機能だと思います。しかし、教育の持っているもう一つの機能として、教えられている人間相互の間の教育といいますか、だれと一緒に勉強したかということが、ずいぶん大きいと思います。

日本の単線型の教育は、非常に効率はよかった。しかし、その結果、子供たちにせよ大人たちにせよ、いつも横にいる人間の質が同じになってしまうという欠点があって、例えば世の中にはお年寄りもいれば、もっと小さな子供もいる。違った人がいるから、その違った考え方や感じ方を自分が進んで理解していかなければならない、というような感覚が少しずつ鈍化してきていると思うわけです。まさに、私は、生涯教育の根本思想は、横の人間の多様化を図るということにも通ずると思いますね。

有光　私もそう思います。現在の学校教育は、非常に評価していい内容を持っていると思うのですが、反面、生涯のある時期に入学した者に対する教育機関でしかないような状態になっております。大学の先生方なども、日常の教育なり、研究なりに没頭されるけれど、ほかの

縁のない学生や一般人に対する関心というものは案外薄いと思います。ところが、縁のないような者が大学に進学できる機会を与えられるということが、そのような人たちにとってどれだけ幸せなことか。社会全体がそれによって、どれほど豊かなものになるかということを、大学の先生方ももう少し考えていただければ、非常にありがたいことだと思います。

民主主義というものは、もちろん基本的には平等でなければならないわけですが、同時に、指導的な立場の人とそうでない人とか、いろいろな人がいるわけですから、それぞれの場でエクセレントな人がもっと尊重され、育成されるような社会であっていいんではないかと思います。そのような点で、私は、今までの社会の在り方は、必ずしも充分でなかったと思いますが、それを手直しするのが、生涯教育だと思います。

山崎　本当にそう思います。現代社会は、日本に限らず、あまりにも学校教育の比重が大きくなりすぎて、人づくりが学校に一元化されていますから、学校でだめなら全てだめという考え方が生まれやすく、それが日本社会の不幸の一つの理由になっていると思います。ですから私は、学校と並んで、スポーツの団体があったり、青年活動の場があったりして、青年が同時に多様な場所の中で役割を与えられて、それが全部生涯教育という一つの枠のもとで、価値を認められていけば、かなり救いが出てくるのではないかと思います。

有光　やはり、人間が生涯を通じて学習できる社会こそ、本当に人間のために幸福な社会であるというように、人々の意識もだんだん変化していくのではないかと思いますね。

教育の文化化、文化の生活化

山崎　今回の答申は、考え方の提示という性格が非常に強いわけです。それを実際の施策として実行しようとする場合に、心すべき事柄として、答申に盛り込んだものもありますが、その点についても触れておきたいと思います。

私の考えですが、生涯教育というものは日本人の住んでいるタコつぼのからを破っていくことに大きな意味がありますから、それに対応して施策に当たるそれぞれの役所、あるいは公的機関というもののからも破っていかなければならないだろうと思います。

それと同時に、官と民との壁も何とかして風穴をあける必要があります。生涯教育というのは、いろいろな人が行う。つまり、生涯教育の一つの思想は、教育という

ものは国だけが行うのではないということだと思います。基本的には国民が行う。そのために国は、大きな手伝いをするのだということですから、その国民の一つとしての民間団体、あるいは企業というものの仕事を、お役所は大いに理解していかなければならないと思うのです。

有光　生涯教育は、結局、個人個人の生涯学習の問題になるわけですから、それについて制度的に、あるいは施設面でそのようなことが可能となる配慮をすることが、行政の立場だと思います。

山崎　行政が文化に手を出すということはもってのほかであるという意見がありますが、私はそうは思いません。文化と教育との関係でいえば、文化を教育にするのではなく、教育を文化にするということが、これからの考え方なのではないかと思います。

有光　私は、それをさらに進めて、教育を文化にし、文化を生活にするのだといいたいですね。文化が独自の発展をしながら国民の前にあまねく展開されていくことを考えた時、教育は文化の外にあるものというよりは、文化と一体的な存在ということがぴったりするようでありたい。さらに、各人が文化を生活の中に活かせることを目指して、そんなことを思います。

山崎　実際問題として、これからは学校の先生方も行政官の方々も、いろいろ勉強していかなければならないと思います。つまり、これは我々中教審の委員が全てを知っていて、これをみなさんに教えて差し上げるという性質のものではありません。我々もまだ知らないのですから、それを発見していく糸口だけを提示している、というように理解していただきたい。

有光　本当にそのように受け止めていただけるとありがたいのです。これは大事な問題ですから、みんなが一緒になって検討していただきたいと思います。

山崎　日本の社会のかなり根本的な変化を目指しているわけですから、その先はまだ見えないわけで、みんなで手探りする以外にないのです。そのような努力の中で、将来の生涯教育の姿が出てくるのではないでしょうか。

有光　生涯教育は、国際的な観念としてスタートしておりますが、ユネスコなどでは生涯教育が一番成功する国は日本であろうということをいっております。ぜひ、そう進んでほしいものだと思います。

山崎　本当にそうだと思いますね。

（了）

次号目次

特集　我が国の教育水準

我が国の教育水準　諸澤　正道

座談会

戦後三〇年の教育の推移

（出席者）奥田　真丈・荒川　潤
佐藤　孜・永井多恵子
（司会）上野　保之

調査統計と教育　森　隆夫

教育費と我が国の教育水準　市川　昭午

生涯教育と我が国の教育水準　山本　恒夫

解説・資料

「我が国の教育水準」の概要　文部省大臣官房調査統計課

編集後記

▽中央教育審議会の答申「生涯教育について」は、内容全体を通じて「我が国の生涯教育の現状や推進の方向、あるいは人々の生涯各時期の課題などが十分理解される」、「学歴主義の価値観から、個人の側に立っての『何を学び取ったか』という価値観への転換を示している点はよい」、「行政を、意欲のある個人に学習機会や情報を提供するワキ役の立場に置く考え方が全体に貫かれたことはよい」等々の評価を教育関係団体や新聞等から得ています。

▽このため、文部省では、答申全文ができるだけ多くの人たちに読まれることを願って、「生涯教育」という小冊子を市販しています（大蔵省印刷局発行・二五〇円）。答申本文のほか、答申の概要、参考資料等々を収めた八六ページのものです。

▽答申でも、「生涯教育の必要性は、各人が自己の体験を通じて自ら認識していくべきものであるが、行政施策の面からも国民の理解を深めていく努力が必要である」と指摘しておりますので、種々の媒体を活用し、多角的な企画をたてて答申内容の普及に努めています。本誌の特集もその一環として実施したものです。（企画室）

MEJ　61　月刊　「文部時報」　8　月　号　第1251号

著作権所有　文部省　昭和56年8月5日　印刷　昭和56年8月10日　発行

発行所　株式会社ぎょうせい

本　社　東京都中央区銀座7丁目4番12号（郵便番号　104）
（営業所）東京都新宿区西五軒町52番地（郵便番号　162）
電話　東京（268）2141（代表）
振替口座　東京9―161番
印刷所　株式会社行政学会印刷所

定価　250円　（〒50円）

年間購読料　3000円　（〒共）

・ただし，増大号，臨時号の場合は別に代金を申し受けます
・なお，購読のお申し込みは直接営業所またはもよりの書店にお願いします